

Dragon ball ODYSSEY

キセツ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球に存在する古代文明の遺産。かつて光を信じ、光に導かれた者が影の存在に立ち向かった……。一人の青年が現実にも近い夢を見ていた。『円佳大吾』は地球人とは違う異星人と遭遇し、光の鎧が青年を救う。その光の鎧の名は『ティガ』。今、宇宙からの侵略者から地球を守る為、再び目覚める。

目次

受け継がれる光く覚醒する魂たちく

1

初陣

—————

18

テイガの決意

—————

34

支配の中で 前編

—————

51

受け継がれる光く覚醒する魂たち

1人の青年が夢を見ていた。その夢には石でできた現代ではあまり見かけない建造物や白い布を着用した人々が存在していた。人々は笑顔である者は会話をし、ある者は農作物を耕していた。そんな何気ない情景に暗雲が立ち込んだ。空に黒い人影が見えたかと思うと一瞬にして周りに炎が燃え上がった。人々は悲鳴をあげ、逃げ惑う。それに容赦なく人影はエネルギーの塊を放つ。どんどん人が死んでいく。青年は恐怖で動けずにいた。その時、真横から眩しい光が現れた。その光は影へ向かい、激しい衝突を起こす。衝撃波は空を揺らし、大地に轟音を響かせていた。やがて光と影は力を溜め、エネルギー波を放った。互いのエネルギー波は激しくぶつかり、その後大きな爆発を起こした。その爆発に青年も巻き込まれた。腕で顔を隠した。少しした後、腕をどかすとそこは真つ暗な空間になっていた。辺りを見回しても何もなかった。暗闇だった。すると目の前に青白い光が現れ、そこから白い服装を着飾った巫女のような女性が現れた。

巫女「貴方は光に選ばれました」

青年「光に選ばれた？それはどう言うことだい？」

巫女「いずれわかります・・貴方は闇と戦う運命にあると」

青年はまだ疑問を覚え、さらに質問しようとする。と巫女は腕を青年の顔の前まであげ、手のひらから光の粒子を放ち、青年を包み込む。青年はそこで夢から目覚めた。

車の中で目覚めた青年。彼は大学の先輩達と共に車でとある遺跡へと向かっている最中だった。青年のは円佳大吾。とある大学の考古学研究会に所属している青年だ。大吾は頭を片手で抑え、夢のことを考えた。光と影の衝突・・光から現れた巫女、そして巫女が言った『光に選ばれた』の意味を考えた。その様子を心配したのか隣の座席に座っていた少女に心配された。

少女「大吾君大丈夫？」

円佳大吾「大丈夫だよ真矢さん。ちよつと変な夢を見ただけだから」

大吾は少女にそう伝えながら微笑む。少女の名は堺真矢。大吾とは同じ学年で研究会で知り合った仲だ。少しして車が止まり、大吾達は車から降りる。目の前には古墳のような大きな遺跡が建っていた。人里から少し離れたところに建てられたこの遺跡には光を讀んでいた種族の墓などがあるらしい。大吾達は遺跡へと入っていく。遺跡に向かった研究会のメンバーは大吾と真矢を含め五人だ。研究会のリーダーを務めている阪田伶花、伶花の友達である宇佐美翠、そして気弱で眼鏡をかけた羽田諭吉。その五人はどんどん遺跡の奥へと向かっていった。

羽田諭吉「だつ大丈夫なんですか伶花さん？誰にも許可取つてないんですよね？それ以後輩2人まで連れて」

阪田伶花「大丈夫大丈夫。何かあつたらその都度対処すれば良いし」

羽田諭吉「その何かがあつたらまずいんですよ・・翠君からもなんか言つてくださいよ」

宇佐美翠「なんか言えつて言われてもな。こいつがそう簡単に止まる奴じゃないのはお前も十分わかつてんだろ？」

羽田諭吉「そうですけどお」

諭吉の不安をよそに五人は進んでいく。遺跡の中は薄暗く、全員が持つてきていた懐中電灯が頼りとなっていた。大吾はふと自分達以外の人の気配に気づく。少し奥の通路に誰かが通つていったように見えた。大吾はそれを追いかけていった。諭吉が静止するもそれを聞かず、人影を追いかけていく。たどり着いた所は開けた場所だった。壁には様々な絵のようなものが描かれていた。奥の方に目をやると棺が一つ置いてあつた。棺の元へ向かうとその棺の上におそらく大理石で作られたオブジェクトと石板が置いてあつた。石板には古代文字が書かれており、大吾は手に持ち懐中電灯で照らす。そして大吾が解読できた部分を口に出して読む。

円佳大吾「光の戦士『ティガ』」

石板を元の場所に戻すと目の前に突然夢に現れた巫女が立っていた。

巫女「お待ちしておりました。大吾」

円佳大吾「なぜ僕の名を？それに待っていたって」

巫女「貴方に伝えたはずです。『光に選ばれた』と」

巫女は棺の上に乗っていたオブジェクトを手に取り、大吾に渡す。大吾は戸惑いつつもオブジェクトを手に取る。

円佳大吾「これが光に選ばれた証拠なのか？」

巫女「いいえ、これは戦士としての証・証拠など必要ありません。清く正しく光を信じる者に光は力を差し伸べるのです」

円佳大吾「それがたまたま僕だったのか」

巫女「はい。申し遅れました私の名は『ユザレ』・貴方を導く為に参りました」

円佳大吾「僕を導くって・ちよっと！待ってください！」

ユザレは光の粒子となり、徐々に消えていった。大吾は困惑するも足音が近づいて来ることに気づき、そちらに目をやった。

阪田伶花「良かった無事ね。全く一人で動かないでね危ないから」

羽田諭吉「そもそもここに来なければこうならなかったわけで・」

阪田伶花「はいはい説教は帰ってから聞くわよ。それより円佳君！それ何!？」

伶花は大吾が持っていたオブジェクトに目をやると大吾に近づき、オブジェクトを奪うような形で手に取り、まじまじと見つめる。

阪田伶花「これ、古代文明の遺産じゃないの。よくやったわ円佳君！早速うちの研究室に持ち帰って調べるわよ！」

円佳大吾「あつあのそこに石板がありますよ」

阪田伶花「石板くん？パスパス。解読するのめんどくだから」

宇佐美翠「こつちの方が重要だろ。しようがないこれは俺が調べるとしよう」

翠は棺の上に乗っていた石板を持ってきたバッグに入れ、出口へと向かった。花は鼻歌でも歌いそうな上機嫌だったが大吾はそれとは真逆に不安で立ち込んでいた。突如自分の目の前に現れた光の巫女ユザレ。石板に書かれていたティガとは一体なんなのか？頭から離れずにいた。その不安そうな顔を心配そうに見つめる真矢。五人がそれぞれの思いを抱きながら入ってきた出入口から外に出て、車に向かう瞬間、車が突如爆発したのだ。戸惑いを隠せない五人。それして爆発した車の隣に何者かが着地する。外見は肌が紫色で黄色の斑点のような模様が頭にあつた。服装も大吾達が身につけているような服でなく、どこか民族が身につけていそうな服装だった。右手にはガントレッドのようなものを装備し、左目には赤色の機械を付けていた。これが大吾の異星人とのファーストコンタクトだった。

異星人「へへへ、やっと姿を現したか。さあーてどうせ『アレ』持ってんだろ？」

阪田伶花「アレ？アレって何よ？」

異星人「惚けてんじやねえよ、今お前が持つてるもんだよ」

異星人が指を指した。それは伶花が大吾から奪ったオブジェクトだった。伶花は指がどこを指しているのか気づくとオブジェクトと大吾に押しつけた。

異星人「さてとここにお前らにふたつの選択肢を与えてやるよ。まず一つ、『それを俺に渡すか』。二つ、『ここで死ぬか』。さあどっちか選びな！」

諭吉は恐怖に震え、大吾に渡すよう進言した。翠と伶花は渡すなど大吾に言い放つ。真矢は異星人の方に目をやっていった。異星人は余裕そうに口角を上げていた。大吾は目を瞑り、息を吐くと異星人に近づく。

円佳大吾「渡せばみんなを殺さないんだな？」

異星人「ああそいつをくれれば殺さないかもなあ」

異星人はガントレットを目の前に持つていき、大吾の方を見るとガントレットを大吾に向けた。

異星人「でもよお。別にお前らを生かす理由がねえんだよなあ。お前らのような戦闘力が低い奴らをな」

四人は身構える。大吾は一步引いた。異星人は不敵な笑みを浮かべ、ガントレットか

らエネルギー光弾を発射する。諭吉、真矢が目を瞑り、伶花は驚きのあまり硬直化し、翠は大吾の場所へと走り出そうとした。大吾は自分は死ぬと本能的に感じ、オブジェクトとを自分の前に突き出した。その瞬間、オブジェクトの一部分が展開し、そこから眩い光が放たれる。その光は大吾を包み、あまりの眩しさに異星人は手で光を遮ろうとする。光が止み、大吾の姿が露わになった時、誰もが驚いた。黒と銀の甲冑のようなものに身を纏っていたのだ。大吾もまた自身の姿に驚いていた。

異星人「なつなりやがった。こいつが『ティガ』か！」

そう叫び、異星人は大吾に殴りかかった。大吾はすぐさまその攻撃を避け、異星人の体に組み付く。組み付きながら前進し、そのまま異星人の顔目掛けて殴る。異星人の顔に当たり、少し後退する。

異星人「チツ、まさかティガが現れるとはな・・・こいつは一旦引かとするか」

異星人は宙に浮き、空へ逃げようとする。その瞬間、黄緑色の光弾に当たり、爆発する。地に落ち、体勢を整えようとする。光弾が放たれた所に目をやるとそこには宙に浮いた青年がいた。青年は右手にエネルギーを溜め、先程より大きな光弾を異星人に向けて放つ。異星人は焦りながら逃げようとするも青年がそれよりも速く光弾を放ち、たちまち異星人は悲鳴を上げながら爆発する。五人は啞然としていると青年が降りてきた。

青年「無事で良かったです。とりあえずここで待っていてください。その内迎えが来

ると思います」

円佳大吾「あつあの助けてくださりありがとうございます。僕は円佳大吾って言います。今はこんな格好なんですけど・・・すいません」

青年「・・・お前がティガか」

円佳大吾「ティガ？あのティガって一体なんなんですか？」

大吾が青年に質問しようとするプロペラの音が近づいてきた。一機のヘリコプターが着陸してきた。大吾達は青年にヘリコプターに乗るよう勧められ、乗り込んだ。ヘリコプターは軍用用の為、ある程度の人数が乗れるようだった。ヘリコプターの中には褐色の独特な服装と白いマントのようなものを身につけた男性が待っていた。その男性の左目には大きな傷がついており、髭がそれなりに生えていた。

男性「ご無事でなりよりです。安心してください、今から向かう場所は安全な場所なので気を休めてください」

その一言を聞き、翠、伶花、諭吉、真矢は椅子に座った。男性は大吾に近づいた。

男性「ティガよ、どうやらまだ力が目覚めていないようだな」

円佳大吾「あの、ティガってなんなんですか？なんで知っているんですか？」

男性「それについては後で詳しく説明するでしょう。それより、額にあるクリスタルを触ってみるといい。そうすればスーツが脱げるはずだぞ」

大吾は男性に言われた通り、額にあるクリスタルに恐る恐る触れるとスーツ全体が淡い光となり、右手へと集中する。そして先程のオブジェクトへと形を変え、大吾は鎧から解放された。

円佳大吾「あのありがとうございます。先程から助けてもらってばかりで」

男性「心配することはない。これが私たちの仕事だからな」

それから少し時間が経ち、ヘリコプターがどこかのヘリポートに着陸する。先に男性が降り、建物内へと案内する。少し歩き、エレベーターを経由して開けた場所に案内した。

男性「申し遅れました。パラガスと申します。この『TPG』の指揮などを務めていきます」

宇佐美翠「TRG？なんじゃそりや、聞いたこともない組織名だな」

パラガス「それもそのはず、まだ具体的には活動をしていないからな」

阪田伶花「それは良いとしてパラガスさん、さっきのあの異星人はなんなの？それに円佳君が変身したあのティガってのも」

パラガス「順々に説明していくつもりだ。まずあの異星人について、アレは恐るべき宇宙軍『フリーザ軍』の尖兵。奴らはこの星を自身のものとするために突如として地球に近づいてきたのだ」

パラガスが左腕を横に大きく振り上げると後ろの大型液晶パネルの画面が変わり、様々な異星人の顔と情報が表れる。画面の中央には他の異星人よりも大きく顔を映しているフリーザ軍の長であろうものが映っていた。

阪田伶花「このいかにも悪人つてのがそのフリーザ軍の長？」

伶花が指を指し、パラガスに質問をする。

パラガス「その通りだ。この者こそが宇宙の帝王『フリーザ』。私の故郷の星もこのフリーザによつて滅ぼされた」

円佳大吾「故郷の星が滅ぼされたつてパラガスさんあなたもしかして」

パラガス「私は地球人ではない。私は『サイヤ人』と呼ばれる戦闘民族。しかし故郷を失い、途方に暮れた我々を受け入れたこの地球第二の故郷を守る為に我々は尽力を尽くす限りだ」

堺真矢「異星人にも私たちみたい考え方が違うんですね。あのティガについてそろそろ話してもらっても大丈夫ですか？」

パラガス「ではお話ししよう。ティガとは古代文明より存在したある民族を守護していた光の戦士だそう。我々もある者の協力により、ある程度の情報を得ることが出来たが不明な部分が多いのは確かなのだ」

羽田諭吉「光の戦士・・・そんな凄い人に大吾君はなつたんですか？」

パラガス「君たちが目の当たりにした通りだ。しかしながら長い眠りから目覚めたティガはまだ力が不完全な為か、あのような姿になっただと我々は推測している」

宇佐美翠「あの姿が本来の姿じゃないとするならどんな見た目なんだ？」

パラガス「おそらく黒と銀ではなく、光を象徴する色なのではないかと・・・これも憶測に過ぎないが」

宇佐美翠「それはわかっていないのか。もしかしたら・・・」

翠はバッグから遺跡から持ち帰った石板を取り出し、パラガスに見せる。

宇佐美翠「こいつならティガについて何か情報が得られるかもな。なあこの施設でこれを解読させてくれないか？ 勿論情報提供もする」

パラガス「本当か？ それはありがたい。実は君たちに協力を頼もうと考えていた所なのだ」

阪田伶花「協力なら勿論YESよ。アイツらに一泡吹かせてやりましょ」

宇佐美翠「一泡吹かせられるかどうかは分らんがこの施設は俺たちの研究室より良さそうだからな」

羽田諭吉「あつあのお僕はどうしたら良いですかね？」

阪田伶花「勿論私に協力してもらおうわよ。良いわよねえ？」

伶花は圧をかけ、諭吉は渋々了承する。真矢も協力に前向きで残りは大吾の返事次第

となった。

パラガス「無理に君が戦う必要はない。戦闘は我々に任せ君は彼らと共にティガの解説をしてくれれば良いんだ。無論協力しないと言う選択肢もある」

大吾はふと頭にユザレの言葉がよぎった。『闇と戦う運命にある』その言葉が本当なら自分は戦いから逃れたいと感じた。戦わずして誰かが傷つき、倒れていく場面を夢で見ていた大吾。彼は深呼吸をし、口を開く。

円佳大吾「やりませう。ティガに……光に選ばれたのが僕ならみんなを守りたいです」
パラガス「……そうかでは君たちを歓迎しよう。ようこそTPGへ」

そうパラガスが言うのと横から女性が現れ、大吾達にワツペンを渡していった。そのワツペンにはTPGの名前が刻んであった。それを袖につけ、真矢、翠、伶花、諭吉は女性の案内のもと、別の部屋へと向かった。大吾とパラガスは更に奥の部屋へと向かった。そこには先程大吾達を助けた青年と戦闘服のようなものを身につけた髪が逆立った顔つきがきつい男性と肌が緑色で額あたりに二本の触角が生えた異星人がいた。

パラガス「紹介しよう。右から私の息子『ブロリー』だ。口数は少ないが我らの戦力の大部分を支えてくれている」

ブロリー「ブロリーです」

パラガス「その隣に居ますのが今は亡きサイヤ人の王『ベジータ王』の息子、『ベジータ王』の孫『ベジータ』です」

タ』でございます」

ベジータと呼ばれた男性は大吾を鋭い目で睨んだ。その目に大吾は怯んだ。ベジータは目を閉じた後、目線をパラガスに向けた。

パラガス「そして最後にそこにいる異星人はナメック星人の『ピッコロ』だ」

ピッコロ「ふん、キサマがテイガか。どんなヤツかと思えばこんな貧弱そうなヤツとはな。覚悟しとけよ、足を引つ張らないくらいには鍛えてやる」

ピッコロの言葉に少し自分の身が危ないのではないかと感じとつた大吾。

パラガス「さて、君には色々と伝えねばならない事がある。まずは先程話した協力してくれたある者についてだが・・・」

パラガスの言葉を遮るかのように何者かの姿がそこに表れる。身体全体が青白く光っている為、実物がここに居ない事が瞬時に分かった。見た目はピンク色の肌にエルフ耳、髪はオレンジ色の外巻きショートボブでとても小柄でどこか幼さを感じる見た目をしていた。服装はここにいる誰よりも派手であり、大吾も少し興味惹かれていた。

小柄な異星人「ハイハイイ、ワタシがその協力者の『時の界王神』よ。よろしくね大吾くん」

円佳大吾「はっはじめまして」

パラガス「彼女は界王神と呼ばれる言わば神のような存在だ。その中でも彼女は時。

つまり、歴史などを司る神なのだ」

時の界王神「そんな大層なものじゃないわ。そんな事より、キミにはいくつか伝えておくべき事があるわ。まず一つ、テイガについて。テイガとは古代文明のとある種族によつて作られた光の鎧・・なのは知ってるわよね？」

円佳大吾「はい、パラガスから聞きました」

時の界王神「そう良かったわ。テイガは昔、その種族の前に現れた自らを神という影によつて滅ぼされかけたの。んでその種族の前に突如現れたのがテイガ。当時は全身が光で覆われてたみたいでその詳細な姿は説明されてなかったのよ。でもテイガは・・光は受け継がれていき、その姿が露わになったの」

円佳大吾「どんな姿をしていたんですか？」

時の界王神「それはね・・あの石板に書かれているわ。ごめんね？こつちにも情報が抜けている部分があるから・・そこは補つていきましよう。さて次に二つ目、これも聞いていると思うけど今のテイガは言わば寝起きの状態。まだ力が目覚めてないのよ」

円佳大吾「不完全なんでしたっけ？」

時の界王神「そう不完全体ね。多分戦つていくうちに力が戻つていくと思うけどそれまではそこに彼らに任せてキミは背後から援護してあげてね？」

円佳大吾「あっはい」

時の界王神「さてと・・最後にひとつ。ティガは無限に戦えるわけじゃない。光の中に存在する『ゼペリオン』がスーツ内に存在する限り戦えるわ。もしエネルギーが少なくなったら無理に戦わずに逃げる事、そうじゃないとキミが死ぬかもしれないからね？ 良いわね？」

円佳大吾「はい・・覚えておきます。ありがとうございます、時の界王神様」

時の界王神「良いってことよ。それじゃあとは任せたわよパラガスくん」

時の界王神は満足したかのように笑顔でパラガスにバトンを渡し、その場から消えた。パラガスが大吾の方を向き、語りかける。

パラガス「我々もできる限り手助けはしよう。しかしどうしようもない時は君自身の手で切り開くしか方法がないのだ。その為、彼ら三人に特訓をつけてもらう。私には彼らのような力はない。その為、アドバイスを与えようと思う」

円佳大吾「それだけでも僕からしてはともありがたいことです。ありがとうございます、まずパラガスさん」

パラガスは一礼すると先程の部屋へと向かっていった。大吾はプロリーと共に基地内を探索しはじめた。

それから日にちが経ち、基地内の隊員室に自身の荷物を運び終え、ベッドに座り、一息ついていた。すると部屋の呼び出しブザーがなり、扉を開く。そこにはプロリーが

立っていた。

円佳大吾「ブロリーさん、どうしたんですか？」

ブロリー「手は空いているか？」

円佳大吾「えっああ手なら空いてますよ」

ブロリー「なら付き合ってくれないか？」

大吾はブロリーの誘いになり、ブロリーの後をついていく。ここ数日で大吾はブロリーに様々な事を説明してもらっていた。パラガスの言う通り、口数は少ないが礼儀正しく接しやすくと大吾は感じていた。ブロリーと大吾が辿り着いた場所は基地内に存在する訓練室だった。ブロリーが少し距離を立った場所に立ち、大吾に変身することを促す。翠と諭吉の解説により判明した大理石のオブジェクト『スパークレンズ』を構え、ティガへと変身する。姿はやはり、黒と暗い銀を基調としたカラーリングでその見た目から『ティガダーク』と呼ばれるようになった。

ブロリー「・・・いくぞ」

ブロリーが少し浮き、ホバー移動で大吾に急接近する。大吾は身構え、攻撃体制に入る。ブロリーの右ストレートを避け、反撃を入れようとする。しかしブロリーの方が速く動き、ボディブローを食らう。大きく吹き飛ばされる大吾。少し中に浮いた後、大の字で地面に激突する。重々しく身体を起こす大吾。その大吾に手を差し伸ばすブ

リー。手を掴み、立ち上がり大吾はプロリーに一礼した。

円佳大吾「今回もやられてばかりでしたね。もう少し腕をつけないと実戦で足を引つ張りそうです」

プロリー「前と比べればまだマシだ。あとはどう伸ばしていくかだ」

プロリーの言葉に頷き、大吾はテイガの鎧を解除する。その瞬間、訓練室にアラートが鳴り響く。大吾とプロリーは急いで司令室へと向かった。司令室にはパラガスがオペレーターに指示を出しているところだった。

プロリー「親父、状況は？」

パラガス「ポイント133の街でフリーザ軍の尖兵が暴れている。ベジータとピッコロは既に現場に向かった。お前たちも現場へ急行してくれ」

プロリーと大吾は屋上にあるヘリポートへと向かった。プロリーは屋上に着くと白いオーラを見に纏い、空へ飛び立った。大吾は用意されていたヘリコプターに乗り込み、目的地へと向かった。

初陣

パラガスからの指示を受け、大吾はヘリコプターに乗り込む。パイロットは大吾が乗り込んだ事を確認するとヘリポートから離陸し、目的地へと向かった。

一方、ポイント133ではフリーザ軍の尖兵が破壊の限りを尽くしていた。建物からは黒煙と炎が立ち上り、逃げ惑う人々を容赦なく殺戮していった。ブロリーが現場にたどり着いた時には既に、ピッコロとベジータが敵を格闘戦やエネルギー波で薙ぎ払っていた。ブロリーもすぐさま、市民の逃げ場を塞いだフリーザ軍尖兵を蹴りで吹き飛ばす。ブロリーは避難を仰ぎ、被害を拡大しないよう戦う。

ブロリー「次から次へと・・・」

ピッコロ「威力偵察にしては数が多いな。このまま、攻め落とすつもりか？」

ベジータ「どれだけ増えようと奴らを蹴散らすのが俺たちのすべき事だ」

ベジータは白いオーラを身のまわりに身を纏わせる、先よりも荒々しく尖兵を蹴散らしていく。ブロリーも両手に黄緑色のエネルギー弾を溜め、尖兵が集結している部分に目掛けて放ち、その爆風で数を減らす。その光景を遠くから大吾は眺めていた。信じられない事が次から次へと起こり、少し困惑していた。

パイロット「まもなく目標地点です。想像より、戦闘が激しいので着陸はできたとしても離陸は不可能かも知れません。ここで本部に引き上げます」

円佳大吾「ここで降りろって事ですか？」

パイロット「あなたならできると信じてます」

大吾はパイロットの発言に更に困惑しつつも、空中にいるヘリコプターから飛び降りる。空中で大吾はスパークレンスを掲げ、スパークレンスが展開、光が大吾を包み、ティガダークを装着する。地上に砂塵を撒き散らしながら着地する。大吾の周りに数人の尖兵が現れる。

フリーザ軍尖兵A「なんだこいつ？妙な鎧を身に付けてやがる」

フリーザ軍尖兵B「アレがティガって奴じゃないのか？」

フリーザ軍尖兵C「へっ、なら俺が一番乗りだ！」

尖兵がゾロゾロと大吾へ向かってくる。大吾は身構え、一人一人撃退しようとする。相手の打撃や蹴りを腕で防御しつつ、打撃を叩き込む。怯みはするが致命的なダメージは与えられずにいた。大吾は数の暴力により、徐々に体力が削れていった。尖兵たちが距離をとり、右腕に付けたガントレッドから光弾を放つ。大吾は身を守ることしかできず、一方的に撃たれ続けた。胸の中心部にあるクリスタルが青から赤く点滅し、警告音のような音が鳴り響く。大吾は焦りを感じていた。もしこれが時の界王神が言ってい

たエネルギーが少なくなってきた合図ならこれ以上の戦闘は危険ということになる。光弾の嵐は止み、その中心部には膝をついた大吾がいた。とどめを刺そうと尖兵が近づいてくる。大吾は鎧の中で目を瞑った。もうダメだと諦めた時、紫色のエネルギー波が辺りの尖兵を消し去る。大吾が目を開けるとそこにはベジータが降りてきていた。

ベジータ「こんな雑魚相手に苦戦するとはな」

円佳大吾「すいません」

大吾は俯き、謝罪することしかできずにいた。そんな大吾を尻目にベジータはどこかへ向かっていった。ベジータの向かう先には尖兵の生き残りがいた。身体がぼろぼろで身体を起こそうにも起き上がれない様だ。ベジータは尖兵の胸ぐらを掴み、無理矢理身体を起こす。

ベジータ「貴様らの目的を聞いておこうか。一体なんのためにここに来た？」

フリーザ軍尖兵「ふっフリーザ様の指示で：サイヤ人と光の：戦士の威力偵察だ：：貴様らはフリーザの手によって、跡形もなく：：」

尖兵は事切れ、ベジータは無造作に掴んでいた手を離す。気づけば尖兵たちは撤退しており、街には原形をとどめていない建物と大吾たち四人しか存在していなかった。大吾は頭部のクリスタルに触れ、ティガダークの鎧を解除した。その数十分後、軍用ヘリコプターが複数機、現場に到着した。中からは黒の特殊部隊の服装に身に纏った人々

が現れ、凄惨なポイント133に散らばっていった。ある者はブローリーやピッコロ、ベジータに敵について戦闘から把握した情報を聞いており、ある者は瓦礫から生存者がいないかを確認し、ある者は尖兵や市民の死体を運んでいた。瓦礫を背もたれに俯いていた大吾に特殊部隊の隊員が近づいてきた。よくみると腕にはTCGと刻まれていた。

TCG隊員「円佳大吾さんですね？」

円佳大吾「はい・・・そうですけど」

TCG隊員「こちらをパラガス指令から受け取っております」

TCG隊員の手にはインカムが乗っており、大吾はインカムを受け取り、右耳につけた。インカムを渡した隊員は大吾に一礼するとどこかへ向かって走っていった。するとインカムから女性の声が聞こえてきた。

女性「円佳さん。聞こえるでしょうか？」

円佳大吾「はい・・・聞こえます」

女性「了解です。ではパラガス指令との通信に切り替えますね」

円佳大吾「・・・はい」

パラガス「こちらTCG本部パラガスだ。初陣ご苦労だった。怪我はないかな？」

円佳大吾「怪我はないです・・・怪我は・・・」

大吾は初めての戦闘を経て、自身の無力さを思い知った。ティガの力に選ばれたとし

てもフリーザ軍尖兵の一人を倒す事ができなかったのだ。

パラガス「君が感じていることはよくわかる。だがティガの力が不完全なのだ。阪田君たちも君の力になろうと石板の解析を進めている。時の界王神様だってそうだ。本来なら手を貸すことはないであろう方が一生懸命にティガについて調べておるのだから」

円佳大吾「だとしても今の僕は本当に必要なのでしょうか？ここ数日、ブロリーさんに特訓をつけてもらっていました・・・でも、それでもアイツらに勝てなかった。それどころか足を引つ張っていた」

パラガス「フリーザ軍の動きはまだない。ポイント133で待機してもらえないだろうか？ブロリーやピッコロ、ベジータには一度本部に戻ってもらおうが・・・いつまた奴らが来るか分からない。気休め程度にしかならないかもしれないがそれまでゆっくり休んでくれ」

パラガスとの通信は終わり、大吾は立ち上がる。今は他の隊員たちの手伝いでもしうと大吾は歩き出した。自分に休んだらいる暇はないと。

青い地球が見える宇宙、そこに大きな円盤状の宇宙船が佇んでいた。宇宙船の中から半分機械でできた異性人が地球を覗いていた。そこに紫色の肌をした異性人が入室した。

紫色の異性人「フリーザ様、第一尖兵団からのご報告です」

紫色の異性人は跪いた。フリーザと呼ばれた半分機械の異性人は振り向いた。

フリーザ「そうですか。でどのような情報が得られたのですか？」

紫色の異性人「はい、やはりサイヤ人が現れたようです。数は2、またナメック星人もいたと」

フリーザ「ナメック星人が？ふむ、おそらく『あの時』のナメック星人でしょう」

紫色の異性人「あの時とは一体？」

フリーザは異性人を睨みつける。その目からは明らかに殺気が放たれていた。その殺気に気づいた異性人は汗を流し、話を変えようとする。

紫色の異性人「そつそれとどうやらティガと呼ばれる者も現れたようです」

フリーザ「ティガ？なんです、そのティガとは？」

紫色の異性人は話題転換が成功し、内心に安堵を感じた。そして紫色の異性人は話を続ける。

紫色の異性人「はい、それが単独で調査を進めていた第一尖兵団団長の『イバーム』が発見した地球人の太古から存在する戦士のようです」

イバームとは大吾たちが遺跡で出会った異性人の名のようだ。フリーザは右手で自分の顎を掴み、考えるそぶりを見せる。

フリーザ「ふむ、なるほど。それは良いことを聞きました。そのティガとやらも早々に消しとくべきでしょう」

紫色の異性人「そつそれは何故ですか？」

フリーザ「直感ですよ、直感。ひとまずサイヤ人共を抹殺する事を優先してください。この星を征服する事など簡単な事なのでするから。ひとまず第二尖兵団に準備してもらいましょうか。あなたの部隊も出てもらいますよ、ニューラルさん」

ニューラル「はっ」

フリーザの指示を受け、ニューラルと呼ばれた異性人は素早く、退出していった。それを見送った後、フリーザは再び地球を覗く。

フリーザ「今度こそ、この手で・・・サイヤ人を！」

フリーザは地球を掴むように手を握る。その握った手には殺意が込められていた。

地球、ポイント133の避難所で大吾は他の医療担当の隊員の手伝いをしていた。慣れない大吾はハマしつつも、怪我を負った市民たちを手当していた。避難所には恐怖で怯え、痛みに悶える人が多数いた。大吾はまるで地獄にいるのではないかと思い、神経がすり減っていった。救護隊員が大吾に休憩するよう伝え、大吾は避難所を後にした。少し、崩壊したポイント133を歩いているとインカムから人の声が流れてきた。

宇佐美翠「聞こえるか、円佳？」

円佳大吾「宇佐美先輩？どうしたんですか？」

唐突な翠からの通信に少々慌てる大吾。そんな大吾を気にせず、翠は話を続ける。

宇佐美翠「テイガについて少し分かった事があっただな」

円佳大吾「分かった事？何が分かったんですか？」

宇佐美翠「ああ、おそろくだがテイガは光のエネルギー、ゼペリオンをエネルギー兵器として使用出来る可能性が出てきた」

円佳大吾「ゼペリオンをエネルギー兵器として・・・」

宇佐美翠「そうだ。ただし、今のテイガじゃ使った瞬間にエネルギー切れを起こす恐れがあるな・・・こつちでもテイガの力を元に戻す方法を探してるから・・・てっおい！
伶花どこ行くんだよ!？」

インカムから微かに伶花が慌ただしく何かをしている音が聞こえる。それを制止するためか翠からの通信が切られた。大吾は肩の力を抜く。ほんの少しでも進展が見られたのだ。このまま彼らに任せればきつとテイガの力が元に戻せると。

円佳大吾「・・・誰かがやってくれる・・・？じゃあ僕は一体何をすれば良いんだ？」

大吾はふと自身の考えに疑問を抱いた。彼らばかりに頼ってばかりで自分は何かしたのか？と。さつききの戦闘がそうだ。ベジータがいなければ自分は何もできず、死んでいた。翠達がいなければテイガについて何も知らずにいた。今の自分は本当に必要な

のかと。先程の戦闘で感じていた自身への無力感が増していくのを大吾は感じていた。そして自身に対しての怒りすら感じていた時、背後に気配を感じた。振り向くと、そこにはユザレが立っていた。

ユザレ「ティガに選ばれた戦士は誰もが思い悩み、自分自身に苦しめられてきました」
円佳大吾「・・・だったとしても、僕には彼らのような強さはない」

ユザレ「強さとは力だけではありません。我々の時代の最後のティガも力こそ他の戦士達と比べて、どこか飛び抜けていたわけではありませんでした」

円佳大吾「力はか・・・僕の前のティガはどうやって自身への劣等感に打ち勝っていたんだ？」

ユザレ「彼は人々の前では自身の悩みは明かしませんでした。私の前で明かしたとしてもほんの少ししか・・・」

大吾は唾然とした。ユザレはなんでも知っているものだと考えたいからだ。でもそれは違った。彼女も人なのだ。他人と違い、死して尚もティガとなった戦士を支える為に幽霊のように現れるだけで。

円佳大吾「その人は導くことは？」

ユザレ「・・・出来ませんでした。彼は自らの意志で決め、どれほど傷ついても彼は立ち上がり、最後まで光としてあり続けました・・・自身の命をかけてでも」

ユザレは悲しげな顔をしていた。大吾は何とも言えない気持ちに押しつぶされそうになっていた。自分にはそんな事は出来ない。

ユザレ「私は救いたいです。戦いによつて傷を負ったティガの心を。貴方の心を。そしてあなたにとつて最善である未来へ導くために」

円佳大吾「ありがとうユザレ。今の僕は大丈夫だ。先代の話をほんのちよつと聞いて、少し救われた気がしたよ」

ユザレは少し微笑み、光の粒子へとなくなつて消えた。大吾は空を見上げる。今にでも沈みそうな太陽を見つめ、TCGの簡易拠点へと戻つていった。

その夜、大吾はまた不思議な夢を見ていた。石で出来た建物に囲まれた少し大きい村に大吾はいた。しかし建物はどれもボロボロで至る所から炎が上がっていた。人の気配はなく、大吾は辺りを散策し始めた。散策している途中、大吾は何者かに襲われる。大吾は間一髪のところ回避し、その襲つてきた影を見る。体長は3メートルある二足歩行の獣のような怪物だった。すると後ろから似たような怪物が2体現れる。大吾は後退る。徐々に距離を詰めてくる怪物になす術がないかと焦る大吾。すると自身の右手が光り、その光からスパークレンスが生成される。スパークレンスを空に掲げ、ティガダークとなり、三体の怪物に挑む。飛び蹴りや右ストレートを怪物に命中させる大吾。しかし怪物にはほんの少ししかダメージが入つておらず、逆に怪物の爪や尻尾での

攻撃に怯む大吾。一体の怪物に尻尾で薙ぎ払われる大吾。体制を整え、大吾は翠からの情報を思い出し、大吾はゼペリオンエネルギーを使用した技をどう使用すれば良いのか悩む。ユザレを探すが辺りには誰もいない事を再度確認出来るだけで何も情報が得られないままだった。そして大吾は前に似た夢を見た事を思い出し、その光の戦士のエネルギー波の撃ち方を真似る。腕をL字に組み、そこから灰色のエネルギー光線が放たれる。怪物の一体に命中し、その場に倒れる。しかし怪物はまだ2体残っている。もう一度エネルギー光線を放とうとするが胸のクリスタルが赤くなり、警告音が鳴り響く。エネルギー切れが近づき、撃てても1発と言う状況になり、大吾はどちらを狙うべきなのか悩む。悩めば悩むほど怪物は大吾に近づいてくる。訳もわからずエネルギー光線を放とうとすると側面から大吾とは別のエネルギー光線が放たれ、2体の怪物は黒焦げとなった。大吾がエネルギー光線が放たれた方向を向くとそこには白い光に包まれたティガの様な戦士が腕をL字に構え、立っていた。白い光の戦士が辺りを見渡し、何も無い事を確認すると頭部のクリスタルに手をかざす。光はかざした手に集まり、スパークレンスに似たオブジェクトを形成し、中から古代ローマのような服装を見に纏った青年が姿を現す。大吾もそれに合わせ、ティガダークの鎧を解除する。

青年「まだ私のように光を捨てていない者がいたとは。無事かい？」

円佳大吾「はい、助けてくれてありがとうございます」

青年「それが私の役目だからね。紹介が遅れた、私は『ゼラデス』最後の光の戦士だ」
円佳大吾「最後の・・・戦士？」

ゼラデス「そうだ。私が最後の光だ」

大吾はゼラデスの案内で村の外れにある巨大な建物に訪れる。そこは現実でも訪れた古墳のような遺跡に似た建物だった。遺跡に入る二人。遺跡の内部は暗く、ゼラデスはスパークレンスの光を頼りに奥へと進んでいく。

円佳大吾「あのゼラデスさん。さつき自分が最後の光だと言ってましたけどあれって」

ゼラデス「そのままの意味だ。私以外の戦士は皆死んだ。だから私しか残っていないのだ。戦える者はな」

ゼラデスは表情を変えずに淡々と答える。二人は大きな広間のような所に到着する。ゼラデスは歩み、石の石碑の前の階段のような場所に腰をかける。大吾に手招きをし、ここに座れと指を指す。大吾は促されるままにゼラデスの隣に座る。

ゼラデス「君もティガに選ばれたようだな。だが迷いがある」

円佳大吾「迷い？」

ゼラデス「そう、迷いだ。でもその迷いは気付きにくいものだ。心を見る力が無いと分からないほどにね」

円佳大吾「でもなんで分かったんですか？まさか・・・」

ゼラデス「そんな力は無いさ。ただ私も似たような迷いがあったんだ。周りが頼りにできるほど強く、自分が弱く感じた。自分は本当に必要かって思った時もあった。でもそんな悩みが今の私を強くしてくれたんだ」

円佳大吾「悩みが強さを？」

大吾は不思議に思った。自分の無力さから感じ取れたのは自身への怒りなどの負の感情だ。ティガの光とは対となるものだ。

ゼラデス「人は生きている限り悩んで悔やんでの繰り返しだ。そんなものに集中しすぎるとキリがない。でもそこから成長することはできる」

円佳大吾「成長ですか」

ゼラデス「そうだ。自分の弱さが悩みの種なら強くなれば良い。だが言葉する事は簡単でも実現する事は難しい。そうだろ？」

円佳大吾「はい。でもそれじゃ解決してませんよ」

ゼラデス「すぐに解決しようとするからまた悩むんだ。誰もがすぐに強くなれるのならそんな悩みなんて生まれはしないさ。時間は限られているが全く成長するわけではない。ほんの少し、感じ取れないほど少しだが確かにこの前の自分より強くなっている」

円佳大吾「前の自分よりも強く・・・」

ゼラデス「そうだ。強くはなっている。だがまあそれが実感できるまでは自分に負けない事だな。自分の劣等感や悩みに」

大吾はユザレが言っていた先代ティガの強さが心の強さであることに気付いた。大吾は思い切つて聞くことにした。ゼラデスの悩みについて。

円佳大吾「あの、ゼラデスさんは悩みとかありますか？」

ゼラデス「無いと言えば嘘になるかな。他の戦士が死んでいく中私はティガに選ばれたが故に生き残ってしまった。幾度も仲間を失う辛さを味わってきた・・・だが下を向いてはいられない」

ゼラデスは立ち上がり、出入り口へと向かう。大吾も立ち上がる。後を追いかけようとするがゼラデスの背中を見て、足を止めた。ゼラデスの背中が大きく、どんな困難にも打ち勝つていった歴戦の戦士に見え、啞然としていた。

ゼラデス「君も前を向いて歩むんだ！どんな苦しくても辛くても光は：君の力になってくれる。君の心の強さに」

ゼラデスは最後に振り向き、出入り口から眩い光が大吾を包み込む。大吾は目を瞑り、もう一度目を開くとポイント133の簡易テントに横たわっていた。大吾は近くに置いていたスパークレンスに目を向ける。そこには微かに輝くスパークレンスが置か

れていた。

TPG本部でパラガス、ブロリー、ピッコロとベジータが司令室に集まり、会話をしていた。

パラガス「大吾君にはもう少し時間が必要だったのかもしれないな」

ピッコロ「だとしてもだ。奴はまだ心まで戦士にはならないだろう。戦闘能力が身についても心があのままなら状態は変わらんぞ」

パラガス「考えものだ・・あのままの状態が続いてしまうと彼の身が心配になるな」

ベジータ「あの程度で心が折れているのであれば最初から戦わなければ良い。本来のティガの力が出ていないのは奴自身の問題だ」

パラガス「大吾君自身の問題？ティガは眠りが長すぎたが故に力が目覚めていないのでは無いのか？」

ベジータ「アレは奴のどこかしらにある迷いやら悩みやらが問題だ。戦う覚悟が生半可な奴に戦士になる資格はない」

ベジータは大吾の心の弱さが原因と告げる。パラガスや時の界王神は時が時が経ち過ぎたのが原因だと考えていた為、装着車である大吾に問題がある事は考えていないわけではないが可能性はそこまで高くはないと考えていた。

パラガス「だが大吾君のどこに問題が？彼は我々のように戦いに長けているという訳

ではないのだぞ」

ベジータ「そこだ。だからこそ戦いに迷いが生じる。それが正しいのかどうかを先に考えちまう」

ピッコロ「つまりは奴の価値観を変えれば良いってことか」

ブロリー「それはまずいのではないか？」

パラガス「そうだな・彼が戦士になるかどうかは彼自身に確かめたい。我々は彼の決断を導く側でありたい」

ベジータは無言で司令室を後にし、ピッコロもそれに続いて司令室を後にした。パラガスは溜め息をし、大型モニターに目をやる。現在の被害はポイント133だけであるが、いずれ被害が拡大し、現在の状態ではフリーザ軍に敗北する事になるだろうと考える。

パラガス「：大吾君の覚悟がティガに影響しているのなら、彼の覚悟が芯から決まったらどうなる？」

パラガスは独り言を呟き、更に考え込む。最悪な結末にしない為に自分には何が出来るか。

ティガの決意

翠は研究室の機材を使い、遺跡で回収した石板の解析を行なっていた。真矢と諭吉は彼の手伝いをしていた。

羽田諭吉「それにしても阪田さん、またどこか行きましたね」

宇佐美翠「正直言つて、こつちの手伝いをしてほしいがアイツがこんな物よりロマンが溢れる物に興味湧かない訳ないからな」

羽田諭吉「そういうえば、阪田さんロマンを求めて考古学研究会のリーダーになったんですたっけ？」

宇佐美翠「まあな。だけどアイツのロマンを追求する姿は本気だつてことはアイツの行動を見りや嫌でも分かるんだよな。今はあの回収されてきた未知の兵器に関心があるみたいだが」

翠と諭吉が雑談をしていると怜花が研究室へとやつてきた

阪田怜花「どう？解析進んでる？」

宇佐美翠「ある程度はな。さつき解析出来たのはティガの他にも光の戦士がいたつてことかな。それと光は突如現れた放流者にもたらされたつてことか」

阪田伶花「ほうほう、ティガのような光の戦士に光をもたらされた放流者ねえ……それについての見当は？」

宇佐美翠「ないな。遺跡に行けば分かるかもしれないが現状が現状だけに難しいな」

阪田伶花「んじや兵器解析のレポートをパラガスさんに届けてくるからついでに頼んでおくよ」

宇佐美翠「兵器解析のレポートか。何が分かったんだ？」

阪田伶花「色々だよ。面白い事になったわ。もしかしたら戦略が向上するかもしれないから伝えてくるの。それじゃまた後で」

伶花は研究室を後にし、翠は自身の席に着いた。解析途中のデータが映し出されているパソコンに目をやり、作業を再開する。諭吉も別の部分の解析を再開し、真矢は資料を整理する。

堺真矢「宇佐美さん、ティガの他にも光の戦士がいたって本当ですか？」

宇佐美翠「ああ、石板に記されていたよ。その中で最も強い光がティガだった。だからティガは必要とされてるんだろうな今も」

羽田諭吉「大吾君は大丈夫でしょうか？」

堺真矢「大吾君……」

伶花は司令室へとたどり着き、パラガスに声をかける。

阪田伶花「パラガスさん、これあの異星人が使っていた兵器の解析レポートなんですけど」

パラガス「ほう、では受け取っておこう」

パラガスはレポートをペラペラとめくり、目を通す。ある程度全体を見通し、レポートを伶花に返却する。

パラガス「機械構造について詳しく記載されているな。これならすぐに技術担当に奴らの兵器を応用した兵器が開発できるかもしれないな」

阪田伶花「そうですか！後、翠達が遺跡自体を調べに行きたいと言っていましたよ」

パラガス「遺跡自体をか。確かに有力な情報が得られるかもしれないが・・・分かった、検討しておこう。そう翠くん達にも伝えておくれ」

阪田伶花「了解！」

伶花はパラガスに敬礼をするとそそくさと司令室を後にした。パラガスは少し微笑み、大型スクリーンに目を向ける。するとパラガスの隣に時の界王神が薄い青色の状態で現れる。

パラガス「どうなさいましたか？時の界王神様」

時の界王神「少し妙な事が分かったのよ」

パラガス「妙？それは一体？」

時の界王神「古代のティガと影の戦闘の前後の歴史を確認していたのだけれど、影が現れる前に時空に歪みが生じていたのよ」

パラガス「時空に歪み？それでは・・・」

時の界王神「ええ、おそらくだけどあの影、別の時代から来てる事になるのよ」

パラガス「だとすると一体何故あの時代を選んだのだ？」

時の界王神「確かにあの時代にはティガがいた。でも地球全体を見ると文明はあまり発展してないのよ。地球を狙うならうつつけの時代。そこを狙った結果ティガと戦う事になった。これが私の今の推測よ」

パラガス「やはり情報量が推測するには足りないと言うことか。引き続き調査を続けていく所存でございます」

時の界王神「オツケ、こつちでも調べてみるわ。それじゃ頑張つてね」

時の界王神は消え、パラガスはオペレーターに指示を出す。フリーザ軍の侵攻の被害を抑え込むために。

大吾はポイント133の避難テントで食料配給をしていた。数が少ないが水分や食料を受け取り、感謝を述べる人々が多かった。すると外から音がし、大吾が外を出ると戦車や大型車両が複数台近づき、停車した。TPG隊員の代表がその車両群に近づき、

それを確認した車両群から代表が一人降りてきた。

TPG隊長「我々はTPG。現在、ポイント133の市民の避難テントの設立及び食料配給と警備を現在行なっている」

軍隊代表者「そうであつたか。我々は東の都を担当としている防衛軍である。現在よ、我々が貴軍らの業務を引き継ぐ」

TPG隊長「その気遣いに感謝する。ただし、一つ条件を提示したい」

防衛軍代表者「その条件とは？」

TPG隊長「我々は撤退せずに貴軍らの援助させていただきたい」

防衛軍代表者「少々待っていてくれ」

代表者は車両群に戻っていった。少し時間が経ち、代表者が再びこちらに向かってくる。

防衛軍代表者「貴軍らの申し出を受け入れる事にした。これからよろしく頼む」

防衛軍代表者は右手をTPG隊長に差し出す。TCG隊長は防衛軍代表者に敬礼をし、右手で握手をする。

TCG隊長「こちらこそよろしく頼む。では早速、現在の状況並びに敵対勢力について詳しく説明する。ついてきてくれ」

TCGの隊員たちは防衛軍に近づき、避難テントや簡易基地の設備についての案内を

し始めた。大吾は右耳に装着していたインカムでTCG本部へ通信を行なった。

オペレーター「どうなさいましたか？」

円佳大吾「あの、ポイント133でTCGの現地隊長が防衛軍の人と協力するらしいのですが」

オペレーター「こちらでも確認しました。我々は現地の防衛軍と協力することを前提に組織されてますから」

円佳大吾「そうですか・・あのどうやって確認しているんですか？」

オペレーター「貴方たちのインカムから確認しています」

円佳大吾「そうだったんですね。それではこれで」

大吾はインカムの通信を切り、医療テントへと向かうと防衛軍の軍服に身を包んだ男性の目の前を通りかかった。すると男性は大吾に声をかける。

防衛軍隊員「おい、お前ここで何をしていたんだ？」

円佳大吾「その、防衛軍の代表さんとこちらの隊長が会話していたので気になったので。それで」

防衛軍隊員「ほおそうだったのか。自己紹介が遅れたな。俺は防衛軍戦闘機部隊隊員、『堀河広登』だ。階級は少尉」

広登は敬礼をし、握手を求める。大吾は握手に応え、お互いに少し微笑む。

堀河広登「それにしても業務を放棄するのはどうなんだ？」

大吾は肩から衛生担当の隊員が持つていた医療バッグを提げていた。大吾は少し焦り、一礼をし、歩き始める。広登も大吾に合わせて歩き始める。多少の雑談をしつつ、広登は戦闘機が数機着陸している場所へと向かい、大吾はそのまま医療テントに向かった。医療テントの机にバッグを置き、中からスパークレンスを取り出し、外へとすぐさま出ていった。すると防衛軍の動きが慌ただしくなり、それに合わせてTCG隊員の動きも慌ただしくなる。大吾は近くを通りかかった隊員に状況説明を求めた。

円佳大吾「何があつたんですか？」

TCG隊員「あつあ、ポイント102でフリーザー軍から襲撃を受けたらしい。元々防衛軍が駐屯していたらしいが救援要請を出してきたらしい。とりあえず衛生担当のお前は指示があるまでここで待機していてくれ」

隊員は急足で大型トラックに乗り込み、トラックは走り出した。大吾は退院の後を追おうとしたがインカムから通信が入る。

パラガス「大吾くん聞こえるかな？」

円佳大吾「パラガスさん。状況はさつき聞きました。僕は・・・どうすればいいですか？」

パラガス「君にも向かってほしいが・・・あの時の戦いの傷は癒えたか？」

円佳大吾「だいぶマシにはなりました。やれます」

パラガス「そうか。よし、では現地隊長に事情を伝えておく。彼と一緒に向かってほしい」

通信が途切れ、大吾は現地隊長の元へ急ぐ。装甲車の前で待っていた隊長は大吾を確認すると乗るよう指示を出し、自身も乗り込む。装甲車が発進し、ポイント102へと向かう。現地隊長は大吾にハンドガンを手渡す。大吾はそれを受け取り、使い方を説明を受ける。

TCG現地隊長「良いか？お前は衛生担当なんだ。あまり善戦に立つなよ。それは護身の為に使え」

円佳大吾「はい、お互いなんとかしましょう」

大吾へ指示を出したパラガス。ベジータやピッコロ、ブロリーに対して大吾への援護に向かうよう指示を出そうする。しかし、オペレーターが慌てて、パラガスに報告をする。

オペレーター「パラガス指令、ポイント95にてフリーザ軍の襲撃です。数はポイント102よりも多いとの事です。」

パラガス「何？ニヶ所同時に攻めに入るとは・・・仕方がない。三人はポイント95に向かってくれ」

ピッコロ「ポイント102をアイツ一人に任せるのか？」

パラガスは黙り込む。いくら数が少ないとはいえ、ティガの力は不完全な為、負ける可能性は大いにあった。しかしポイント95の被害を無視するわけにはいかない為、パラガスは三人にポイント95に向かう事を指示した。ピッコロは苦い表情をするが指示に従い、ベジータとブロリーはその後を追う。

パラガス「頼むぞ・・・大吾くん」

広登は戦闘機の中からポイント102の悲惨さを目の当たりにした。複数人の異星人が手からエネルギー弾を建物に撃ち込み、建物は崩壊していった。市民は逃げ惑い、逃げ遅れた人々は次々、異星人に殺されていく。戦闘機部隊は編隊を組み、空を飛ぶ異星人に目かけ、戦闘機に装備されたミサイルや機関砲で迎撃を試みる。しかし、異星人はミサイルはエネルギー弾で爆破し、機関銃は縦横無尽に空を飛ぶ彼らには意味をなさなかった。広登の戦闘機も異星人によって右翼を破壊され、広登は戦闘機の緊急脱出装置を起動し、コクピットから脱出する。パラシュートで降下中、異星人に狙われている事に気づき、パラシュートを急いで切り離そうとする。地上部隊の援護により、ある程度の高さでパラシュートを切り離し、地上へ転げ落ちる。その地上部隊も異星人の猛攻により、大半が壊滅状態だった。大吾がたどり着いた時には防衛軍とTCGの混合部隊が半分しか残っておらず、瓦礫を盾にする為に、走り抜けた。辺りでは爆発が常に起き、

そこは激戦区のようなだった。大吾は大きめな瓦礫に背をつけ、息を整える。ハンドガンの弾は走り抜けている際、正確に狙わずに乱射していた為、早々に弾切れを起こした。大吾はハンドガンをその場に置き、スパークレンスを取り出す。スパークレンスの中央部分は淡く輝いていた。

円佳大吾「僕は・今は僕がティガなんだ」

大吾はスパークレンスを空に掲げる。スパークレンスが展開し、光を放つ。光は大吾を包み、ティガダークの姿へと変える。大吾は盾にしていた瓦礫を飛び越え、フリーザ兵の元へと突き進んでいった。ポイント102に現れたフリーザ兵はポイント133に現れたフリーザ兵とは違い、右手にガントレットを装備しておらず、掌からエネルギー弾を放っていた。その中に、他の兵士とは雰囲気が違う紫色の体色をした異星人がいた。その異星人が他のフリーザ兵に指示を出していた。

フリーザ兵A「ニューラル隊長、妙な奴が走ってきてます」

ニューラル「妙な奴？誰だそいつは？」

フリーザ兵A「アイツです」

フリーザ兵は指を指す。そこには地上に降りて破壊活動をしていたフリーザ兵へと向かっていくティガダークこと大吾だった。

ニューラル「ほう、奴は確かティガだったか。面白い、相手をしてやるとしよう」

ニューラルは地上へと降下し、着地する。数人のフリーザ兵もそれに同伴した。そしてフリーザ兵一人に苦戦を強いられていた。大吾に対して、エネルギー弾を撃ち込み続けた。味方をも巻き込み、大吾は徐々に黒鉛の中へと姿を消していった。

一方、ポイント95では、ブロリー達はフリーザ尖兵たちを薙ぎ払っていた。ピッコロは額に指を当て、指にエネルギーを集中させていた。

ピッコロ「魔貫光殺砲！」

ピッコロは叫び、指に溜めていたエネルギーをフリーザ尖兵に向けて放った。複数の尖兵の胴体を貫き、数を減らしていく。ブロリーも両手に溜めた黄緑色のエネルギー弾を撃ち込む。ベジータはエネルギー弾を放ちつつ、打撃で尖兵たちを蹴散らしていく。

ピッコロ「コイツら・・・囷か」

ベジータ「だろうな。どいつも雑魚ばかりだ。二手に分けて俺たちの勢力を分断するのが目的だったんだろう」

ピッコロ「大吾の奴・・・死んだかもな」

ベジータ「奴がティガだというのならそのくらいの状況、切り抜けてもらわなければ困る」

ベジータを白色のオーラを見に纏い、フリーザ尖兵に突撃する。ピッコロもそれを追うように突撃していく。勢いに身を任せ、フリーザ尖兵の集団を薙ぎ払っていく。フ

リーザ尖兵たちは恐怖に顔を歪め、目の前で自分だけでも逃れようとする者まで現れた。それを見逃さず、徹底的に潰していつてきた。

ニユール率いるフリーザ兵は立ち込める黒煙に目をやっていた。黒煙が晴れるとそこには、うつ伏せで倒れている大吾の姿があった。弱々しく立ちあがろうとする大吾にエネルギー弾を放ち、後方へ吹き飛ばす。大吾は地面を削りながら吹き飛ぶ。胸の中心部に存在するクリスタルは赤く点滅し、警告音を放っていた。大吾はこの時、初陣と同じで自身に無力感を覚えた。自分では彼らを守ることが出来ない。拳に力が入り、己の死を意識するようになる。

円佳大吾「僕には・・無理だったんだ。ゼラデスさんのような人にはなれない・・」

大吾が弱音を吐いていると、後方から防衛軍の戦車部隊の生き残りがニユールに対し、砲撃を開始した。撃ち込まれた戦車の弾を軽々と避け、エネルギー弾を戦車部隊に浴びさせる。戦車は爆発を起こし、壊滅する。大吾は心に絶望を思い描いていた。勝てるわけがない・・こんな化け物にと。その時、大吾の脳裏にとある映像が流れ込んできた。何者かが見ている景色をそのまま頭に投影されていた。投影されている本人も大吾の様に倒れ込んでいた。眼中に映り込む景色は皆、炎が燃え広がり、人々が助けを求めた絶叫が辺りに響いていた。その者は自身の身体を奮い立たせ、目の前にいる影に向かつていく。何度突き飛ばされ、エネルギー弾を撃ち込まれても立ち上がっていた。

その者にも確かに不の感情が芽生えていた。しかし、それを超えた思いが彼を突き動かしていた。負けるわけにはいかない、自分がみんなの光と。大吾はその映像を見終わると辺りを見回す。建物は崩壊し、防衛軍とTCGの混合部隊の生き残りが雄叫びを上げながらフリーザ兵に立ち向かっていた。中には助けを求めている市民もおり、大吾は目の前のニューラルに目を向ける。目の前に映るニューラルの姿が映像の中で見た影と重なった瞬間、大吾の中に一つの感情が生まれた。どんなに打ちのめされても立ち上がるしかない。みんなを救い、奴らを倒す事ができるのは今、自分しかないのだと。大吾は身体を起こし、全身に力を込める。それに呼応するかのよう、ティガダークの鎧が光を浴び始め、やがてその光に全身を包まれる。ニューラルやその付近にいたフリーザ兵と近くにいた混合部隊の隊員たちは驚きを隠せず、その光が晴れるとティガダークの鎧は変貌を遂げていた。鈍い砲金色と黒色から赤と青紫、そして金属光沢を放つ銀色へと姿を変えていた。大型モニターで隊員たちのインカムから送られる映像を見ていたパラガスとオペレーターたちも驚きを隠さずにいた。

パラガス「これが・・・ティガの本来の姿か！」

フリーザ兵の一人が憤りを感じ、大吾へと急接近する。大吾に殴りかかるも右手に装備されている盾状のガントレットで防がれる。拳を弾かれ、逆に胴体に左ストレットを喰らう。少し、後退し腹を抑え込む。大吾を睨みつけ、更に攻撃を加えようとした時、ガ

ントレッドから放たれた光の刃で胴体を切断され、その場に倒れ込む。その光景を見た残りのフリーザ兵は空中に上がり、大吾に対してエネルギー弾を放つ。大吾はそれを側転やバク転で回避しつつ、ガントレッドからエネルギー光球を放つ。何人かに当たり、地上へ落ちていく。地上に落ちていく間に、混合部隊のロケットランチャーによつて爆殺されていく。残りはニューラルだけとなった。ニューラルは下に見ていた地球人によつて、自身の部隊が破れる様を見せられ、怒りに頭が侵食されていた。ニューラルは大吾に格闘戦を挑み、ラツシユを繰り出すのが全て弾かれ、逆に手痛いダメージを負わされる。ニューラルは怒りと同時に焦りを感じ、後方に後退し、エネルギー弾を連続で放つ。大吾はガントレッドで防御する為に身構え、ニューラルの放つエネルギー弾によつて黒煙の中に再び姿を消していった。ニューラルは一通りエネルギー弾を撃ち続けると肩で息をしていた。

ニューラル「けつザマアみる。いきなり姿を変えやがって。所詮は地球人の分際で」
ニューラルはやせ我慢を思わせる笑みを浮かべるが黒煙の中に白い光を確認すると驚きの表情へと変えた。黒煙が徐々に晴れ、大吾の姿が現れた。大吾は腕を水平に広げており、その後腕をL字に組む。右前腕部から白い光が溢れ出し、エネルギーの光線となり、ニューラルに向けて放たれる。光線はニューラルを飲み込み、ニューラルは焦げ、その死体から煙が立ち上っていた。大吾はその場で膝を突き、息を上げる。ニューラル

が倒された事により、残りのフリーザ兵は各々逃亡を図る。その姿を見て、混合部隊は自分達が勝ったことを確信し、勝利の雄叫びを上げていた。

それから時間が経ち、救護部隊が到着し、死亡した隊員や市民、フリーザ兵を回収したり、怪我人の治療に当たっていた。大吾は人気の少ないところで座り込み、スパークレンスを眺めていた。今まで大理石のような見た目だったスパークレンスはパールのような輝きを放つ白色に変わり、部分的に金色のディテールが施されていた。展開する部分は透明で中心部にクリスタルが埋め込まれていた。大吾がスパークレンスを眺めていると、背後からユザレが現れる。

ユザレ「目覚ましたね。ティガの力が」

円佳大吾「アレがティガの本来の姿？」

ユザレ「はい・・・本来の姿に戻った事により、今までより戦いやすくなりました。しかし、それは戦う運命は確定したと言っても過言ではありません」

円佳大吾「後には引けないって事？」

ユザレ「はい、それでもよろしいのですか？」

大吾は目を瞑り、少し考える。今までは自分は戦う力を持つていたとしても救いを求める者に手を伸ばす事ができなかった。今ならできると考え、目を開ける。

円佳大吾「覚悟はできたよ。やれるところまでやってみるつもりだ」

ユザレ「そうですか・・健闘を祈ります。大吾」

ユザレは光となり、消えていく。大吾はそれを見送るとTPG部隊に合流する為に、歩み始めた。

一方、宇宙ではフリーザが自身の宇宙船でティガの覚醒の一部始終を見返していた。いつもより真剣な眼差しはティガごと大吾へと注がれていた。幾ら下級戦闘員の隊長であるニューラルだったとしても、地球で対抗できるのはサイヤ人の生き残りだけだと考えていたのだ。その背後から背丈が大きく、マントを身につけた異性人が現れた。

大柄な異性人「どうだ？フリーザ。地球人はやはり手出しできんだろう？」

フリーザ「そうでもないよパパ。アイツら、力の差がはつきりと分かっているはずなのに抵抗してくるから想像より時間がかかっているよ。それとこのティガとかいう奴も」

フリーザは『パパ』と呼んだ異性人に自身が見ていた映像を見せる。この映像はニューラルの右目につけていた機械『スカウター』から送られた映像だった。その為、視点はニューラルであり、ティガによって倒される瞬間までも記録されていた。

大柄な異性人「ふむ、やはりお前が睨んだ通りこのティガと呼ばれる戦士もサイヤ人と同様、我々にとつて危険分子なのが変わりないな」

フリーザ「そうだねパパ。どうする？また尖兵共を送るかい？」

大柄な異性人「その必要はない。我々自ら地球に地に降り立ち、我らの恐ろしさを哀れな地球人に知らしめるのだ！」

大柄な異性人は頭上に拳を掲げる。その後、部下達に指示を出し、降下準備を始める。大柄な異性人とフリーザはお互いに不敵な笑みを浮かべながら、自分達の手に地球が墜ちるその日を待ち侘びていた。

支配の中で 前編

ティガの力が覚醒してから数日が経過した。各都市ではフリーザ軍の侵略行為が激化し、避難所が飽和状態になる程の状態だった。大吾は西の都の防衛部隊と合流し、フリーザ兵と戦闘を開始していた。ティガの力がある程度理解し、戦闘能力も向上しているが大吾には一つ、大きな弱点が存在していた。それはブローリー達のように空を飛ぶ事が出来ない事だった。その為、本部から出撃する時は、ヘリコプターによって現場へ急行していた。その為、空を飛ぶ事が出来るフリーザ兵との戦闘では苦戦を強いられていた。空中からのヒット・アンド・アウェイによって、大吾一人では勝てない戦闘がいくつもあつた。防衛部隊との連携やピッコロによる増援によって窮地を脱していた。

フリーザ兵A「なんだって言うんだよ！コイツ！」

フリーザ兵の一人が頭に血が上り、大吾に殴り込みに行く。大吾は右腕に装備されているガンレットから光の刃『ゼペリオンスピア』を出現させる。ゼペリオンスピアは怜花によって命名されたティガが持つ専用武器である。それをフリーザ兵の攻撃に合わせ、胴体に横一文字に切り込む。フリーザ兵は力が抜けたかの様に倒れ、動かなくなる。大吾はゼペリオンスピアを構え直し、残りのフリーザ兵と睨み合う。フリーザ兵は

徐々には後退していく。大吾はそれを見て、額のクリスタルに手を当て、ティガの鎧を解除する。大吾は半壊した大きな建物へと向かっていく。中は外装より被害が少なく、資料などが散乱しているだけだった。

老人「おお、来てくれたか」

散乱した資料の山から眼鏡をかけた老人が頭を出した。大吾の姿を確認すると資料の山から抜け出し、大吾に近寄る。

円佳大吾「あの、あなたが『ブリーフ博士』ですか？」

ブリーフ博士「いかにも。私がこの『カプセルコーポレーション』の社長。ブリーフ博士じゃ」

ブリーフ博士は大吾をカプセルコーポレーションの社内に建設された地下室へと案内する。地下室の照明を点けると部屋の真ん中に長方形の机と壁沿いに棚がびっしりと並べられており、大吾から向かって右側の壁には大型のモニターと専用のキーボードが置かれていた。ブリーフ博士は大吾からインカムを貰うと、インカムを大型のモニターに繋がっているコードに接続し、キーボードで操作する。モニターにTCG本部の司令室が映し出される。

パラガス「こちらの様子が見えておりますかな？ブリーフ博士」

ブリーフ博士「バッチリじゃ。えーと確か今回はそちらの開発部と研究部の者が提供

してくれたこの・・・」

パラガス「フリーザ兵が使用していた兵器のデータで、兵器を開発していただけではないのです。現状の我々では案を出す事は出来ませんがそれを開発する為の技能が足りていないのです。そこでカプセルコーポレーションの社長である貴方に依頼したいのです」
ブリーフ博士「ワシはあくまで平和の為に自身の科学力を使用したイン ज्याが・・・兵器なんて、戦争の火種を産みかねんのぞぞ」

パラガス「それは十分承知の上です。我々はフリーザ軍から地球の未来を守る為、今は力を必要としているのです。お願いです。我々に協力してください」

ブリーフ博士「んう、少々時間をくれぬか？考えさせてほしい」

ブリーフ博士はパラガスとの通信を切ると、近くに置いてあった椅子に座り込んだ。腕を組み、深々と考え込む。大吾はブリーフ博士の邪魔にならぬ様、遠くの柵に近づき、差し込まれている資料の一部分を読み始める。難しい数式や理論が並べられており、大吾は資料を深々と読み込む。

ブリーフ博士「大吾君だったかな？もしや君も科学者としての研究を？」

円佳大吾「いえ、僕は考古学の方を少し」

ブリーフ博士「考古学とな。ほほう、古の文化を研究し、現代いまにその技術を活かす事が出来る。何故考古学を？」

円佳大吾「それは・・・惹かれたからです。不意に興味を持ってしまって」

ブリーフ博士「なんであれ、同じ研究者同士じゃ。少し話そう」

ブリーフ博士は大吾の目を見つめる。大吾はブリーフ博士の視線に少し恐怖感を抱くがそれと同時に力強さを感じていた。

ブリーフ博士「こんなに若くして、今は我々の為に戦ってくれているのか・・・ありがたいのお。もしかしたらその時から運命づけられていたのかも知れんな」

円佳大吾「その時？いつですか？」

ブリーフ博士「君が考古学に惹かれた時じゃよ。そのテイガが君を呼んでいたのかもしれんと思ってたなあ」

円佳大吾「テイガが僕を？信じられないな。なんで僕なんだろう」

ブリーフ博士「それが分かったら君はどうする？もしその理由が残酷な理由だったり、しょうもない理由だったりしたら？」

円佳大吾「多分逃げ出すと思います。そんなの僕には荷が重いつて思ってた」

ブリーフ博士「そうじゃな。だからそうするしか出来ない様仕向けたのかももしれんなあ。それに関しては憶測に憶測を重ねるしか方法がないからのお。さてとワシの方もそろそろ答えを出さないとなあ」

円佳大吾「そろそろってまだ時間はあると思いますが」

ブリーフ博士「実は協力しようとは前から考えておった。だが心のどこかにまだ協力したくない、私の開発した物で誰かが傷つくんじゃないかと考えてしまうのさ。だが君の目を見て思ったよ。君のような優しい人になら喜んで力を貸そうとね」

円佳大吾「本当ですか？」

ブリーフ博士「こんな状況に嘘はつかんよ。さて、行くとするか大吾君」

ブリーフ博士は大吾の肩を軽く叩くと、大吾にインカムを返すと地上へと向かった。地上へと向かい、外へと向かう。外に出るとピッコロが空から降りてきた。

ブリーフ博士「おおう、ピッコロさんか。貴方もいるとはな」

ピッコロ「仕方なくコイツらの手を貸してやってるだけだ」

ブリーフ博士「ハハハ、いつも通りで何よりだ。そんな事より、今からお主らの職場に行かねばな。そくれ」

ブリーフ博士が笑いながら手のひらサイズのカプセルのスイッチを押し、地面に投げると人間サイズの鮮やかな色の煙が発生する。煙が晴れるとそこには四人乗りの小さな車が置いてあつた。カプセルコーポレーション社が開発した『ホイホイカプセル』であつた。

ブリーフ博士「さてと、ちよつとしたドライブをしようかのう」

ブリーフ博士は大吾とピッコロに車に乗るよう勧め、後部座席に座る。エンジンをか

け、緩やかに速度を出す。車でTCG本部へ向かっている途中、大吾はピッコロに話しかけた。

円佳大吾「あの、前々から聞きたかったのですが・フリーザと何か因縁が？」

ピッコロ「オレがナメック星人なのはパラガスから聞いていたな？」

円佳大吾「え？あつああ、確かあの時でしたっけ？」

ピッコロ「覚えていたか。オレは地球育ちのナメック星人だ。だが誰にだって故郷がある。オレは地球で生まれたが大概のナメック星人はナメック星で暮らしているのは想像できるか？」

円佳大吾「地球人が地球で暮らしているのと同じ・・・と考えていいんですか？」

ピッコロ「まあ大体正解か。そのナメック星で・・・奴と戦った」

円佳大吾「感動的な里帰りとはいかなかったんですね」

ピッコロ「ジョーダンのつもりか？まあ良い。そこでオレは・いやオレたちは奴や奴が率いた軍団と戦った」

円佳大吾「オレたちって事はプロリーさんやパラガスさんとも一緒に戦ったんですか？」

ピッコロ「いや、アイツらとはフリーザとの戦いが終わった後にあつた。サイヤ人の生き残りと聞いて最初は警戒していたが、『孫』のような穏やかな奴らで少々驚いたが

な

大吾は淡々と語るピッコロの方に目をやったまま、空いた口が開いたままの状態だった。

ピッコロ「どうした？まだ伝えるべきことを伝えてないぞ？」

円佳大吾「伝えておきたいこと？」

ピッコロ「そうだな。オレやベジータ、それにお前とは面識はないが他の戦士は一度死んでいるのさ」

円佳大吾「え!?!しっ死んだ!?!それって・・・？」

ブリーフ博士「本当じゃよ。ピッコロさんたちは一度死んでおるんじやよ」

円佳大吾「あの、えっと?つまり・・・ゾンビか幽霊？」

ピッコロ「何故そうなる・・・そうか、オマエは『ドラゴンボール』を知らないのか」

円佳大吾「ドラゴンボール?なんですそれ？」

ピッコロ「ドラゴンボールというのはな。世界中に散らばった7つ存在する球を集めることで『神龍』（シェンロン）を呼び出す物だ」

円佳大吾「その神龍を呼び出すとどうなるんですか？」

ピッコロ「願いを一つ叶えられる。一度だけだが死者も蘇らせる事も可能だ」

円佳大吾「だから死んだはずのピッコロさんがいるんですね・・・」

大吾博士不思議そうにピッコロの全身を確認する。ピッコロは険しい顔をし、咳払いをする。大吾はその咳払いを聞くと姿勢を正した。恐る恐るピッコロの顔を見て、疑問に思った事がある。

円佳大吾「あの、そのドラゴンボールを使えば、フリーザ軍をなんとか出来るのでは？」

ピッコロ「それは無理だな」

円佳大吾「え？だってドラゴンボールはなんでも願いが叶うんじゃない？」

ピッコロ「ドラゴンボールはもう存在しない」

円佳大吾「え？」

ピッコロ「ドラゴンボールはな、作った『神様』が死ぬとな、ただの石になるんだよ」
円佳大吾「つまり、神様が死んだって事なんですか？」

ピッコロ「死んではない……ここにいます」

ピッコロの真剣な眼差しに嘘はついていない事がわかった。大吾は固唾を飲むとピッコロは大吾の方に向き、続きを話し始める。

ピッコロ「戦闘型のナメック星人は他のナメック星人と『同化』する事が出来る」

円佳大吾「同化？同化ってあの二つが一つになるあの？」

ピッコロ「そうだな、よって片方の人格と身体が消える。オレは今まで2回同化をし

てきた。初めはナメック星で瀕死のナメック星人と。そして次に

円佳大吾「神様と？」

ピッコロ「そうだ。元々オレと神は同一の存在だったらしい。正確にはオレが生まれ変わる前だが。今はそんな事は今は関係ないな。同化した事により、神は消えた。よってドラゴンボールも消える」

円佳大吾「だから使えないと？」

ピッコロ「そうだ。どの道、神はもう持たなかったらしい。それに他のナメック星人も今は別の惑星で豊かに暮らしているはずだ。そんな奴らにオレたちのわがままを押し付けるわけにはいかんからな」

円佳大吾「ピッコロさんって意外に優しいんですね？」

ピッコロ「嬉しい！・・・着いたようぞ」

ブリーフ博士が運転していた車がTCG本部の地下駐車場に止まり、三人は車から降りた。ブリーフ博士は車をホイホイカプセルに戻し、ピッコロを先頭に司令室へと向かった。司令室にたどり着くとパラガスは少々驚いた顔をし、ブリーフ博士に向き直す。

パラガス「これはブリーフ博士、貴方から来てくれるとは。通信で済まそうとしていたので。御足労感謝します」

ブリーフ博士「いやいや、彼のような者を見ていたらじつとしていられなくてなあ」
ブリーフ博士は大吾の肩を軽く叩きながら、笑っていた。大吾は少々困った顔をし、ピッコロの方に視線をやるがピッコロはそれを黙って見ているだけだった。

ブリーフ博士「さてと、パラガスさん。貴方からの頼み事ですが受けようと思いませんか」

パラガス「おお！それは心強い事です。人員のことでもそうですが貴方には頭が上がりません」

ブリーフ博士「構わんよ。この地球を故郷と呼んでくれる君たちが尽力しているのだ。地球人であるワシが何もせずにいる訳にはいかん。さてと部屋は何処かな？早速案内してもらおうかのう」

ブリーフ博士とパラガスは軽く握手をすると近くにいたTCG隊員がブリーフ博士を案内して行った。パラガスはそれを見送ると大吾とピッコロの方に視線を向ける。

パラガス「君が西の都でブリーザ軍と戦闘中、思わぬ事態になってしまった」

円佳大吾「思わぬ事態？もしかして何処かの都が？」

パラガス「そうだ。ポイント75とポイント13、この二つがブリーザ軍の手に落ちた」

パラガスはオペレーターの一人に指示をし、指示を受けたオペレーターはキーボード

を使用し、モニターを操作する。大吾は二つの映像を目の当たりにした。一つは筋肉質な赤い皮膚の異星人が防衛軍を壊滅状態に追いやっていた。戦い方として侵略者とは思えないほど周りに被害を出さないようにしていた。もう一つは細身の青白い肌をした異星人が目にも止まらぬ速さで動き、瞬きもする暇のないまま、壊滅になっていた。こちらの方は建物が原型を留めておらず、最初に見た映像と対照的だった。

パラガス「彼らは恐らく、フリーザ軍の幹部またはフリーザの側近だと私は考えている」

円佳大吾「だとしても相手が本気を出してきたという事には変わりはないですね」

パラガス「そうだ。それにフリーザ軍の宇宙船はここから離れた荒野に停泊しているという情報も得た。それともう一つ」

パラガスは再びオペレーターに指示を出すとモニターには、複数枚の画像が映し出される。その画像に映る異形の生き物にはツノのようなモノを頭に生やした怪物や翼を生やした怪物、両手が鎌のような怪物が映っていた。大吾はツノの生えた怪物に見覚えがあった。夢の中に出てきた怪物とそっくりだったのだ。

円佳大吾「これは!?なんでこいつが」

パラガス「どうやら見覚えがあるようだが、コイツらは突然として街中に現れ、人々を襲い、破壊の限りを尽くしていた。現在は翠くんたちが調査に向かっているのだが」

円佳大吾「宇佐美さんたちが？」

パラガス「彼らからの提案だよ。もしかしたら遺跡で情報が得られるかもしれないかな。もちろん護衛としてベジータが付いてもらっている。君たちにも後を追って欲しいと思ってるな」

円佳大吾「はい！行きましようピッコロさん」

ピッコロ「オレを自然な流れで巻き込むな。ベジータならオレたちが行かなくても問題はない。行くならオマエ一人で行け」

円佳大吾「それじゃ、行ってきます」

大吾は早々と司令室を出ようとするが、突如司令室に緊急を告げるアラートが鳴り響く。オペレーターが慌てて、状況を調べるとパラガスたちに大きな声をあげる。

オペレーター「ポイント80に先ほどの怪物が二体出現しました！」

パラガス「大吾くん、悪いがこちらに向かって欲しい」

円佳大吾「はい。あの一つだけ聞いて良いですか？」

パラガス「なんだい？」

円佳大吾「ブロリーさんは何処に？」

パラガス「ああ、ブロリーなら『神殿』行ってもらったよ。ある人を呼びにね」

円佳大吾「あの、神殿ってなんですか!？」

大吾が質問をしようとするのとピッコロが後ろから大吾の腕を掴み、引きずっていく。最初は足掻いていたが徐々に大人しくなり、連行されて行った。

円佳大吾「ピッコロさん、神殿ってなんですか？」

ピッコロ「神とその神の使いが住んでいる場所だ。今は使いしか居ないがな」

円佳大吾「じゃあその使いの人を呼びに行ったんですね」

ピッコロ「いや、恐らく・・・この話はここまでだ。急ぐぞ」

円佳大吾「なんでですか？誰を呼びに行つたんですか？」

大吾がピッコロに質問を繰り返すが何も答えてくれなかった。大吾はピッコロの表情から何かしらの事情がある事を察し、後について行った。

翠と真矢・諭吉は複数人のTCG隊員とベジータが遺跡へと出向いていた。翠たちは遺跡の中へと入り、何人かの隊員とベジータは外に待機していた。隊員はチラチラとベジータの顔を見るがベジータが睨み返すとすぐさま真正面を向き直した。ベジータもそれを見ると身体の向きに視線を戻す。少し時間が経ち、ベジータの視線が鋭くなる。遠くからこちらへ向かってくる影が見えた。隊員もそれに気づき、戦闘態勢に移る。ベジータは数歩前へ進み、身構える。姿がはつきり見えるようになる。隊員は恐怖で体が震えていた。赤い皮膚に筋肉質な身体をした異星人だった。

筋肉質な異星人「オマエがベジータか」

ベジータ「ほおオレのことを知っていると。そこら辺のヤツとは違うようだな……何者だ？」

筋肉質な異星人「ワタシの名は『パワダム』。目的は偵察だ」

ベジータ「大将自ら偵察か。丁度良い。来い、相手になつてやる」

ベジータは構を取り、それを見たパワダムも身構える。お互いに一瞬にして距離を詰めた、目にも止まらぬほどの速度でパンチや蹴りを繰り出す。ややパワダムが劣勢でベジータは余裕そうな笑みを浮かべ、攻撃を一時止める。

ベジータ「この程度か……ガツカリだぜ」

パワダム「まだ、ワタシは戦えるぞ」

ベジータ「だからなんだ？オレはまだ本気も出していないのだぞ？」

パワダム「なんだと？今のが本気でないと」

ベジータ「ふん、良いだろう。貴様には見せてやろう。オレの本気をな」

ベジータは力を込める。周囲に白いオーラが徐々に大きくなり、大気や地面を揺らす。やがて白いオーラは金色のオーラへと変化し、髪や眉毛は金髪に、目は碧眼へと変化した。パワダムはその姿に息を呑む。

パワダム「その姿が……」

ベジータ「これがオレの本気。『超サイヤ人』だ」

パウダム「超サイヤ人。フリーザ様からは『ソングクウ』しかなれないとお聞きしていたが」

ベジータ「あの時はアイツしかなれなかった。だが今は違う！このオレが宇宙一だ！」

パウダム「大きく出たな。プライドの高さは宇宙一だな」

ベジータ「お喋りはここまでだ。最後は一瞬にして消し飛ばしてやる」

ベジータはパウダムの懐に一瞬にして飛び込むと溝を勢いよく殴る。パウダムの顔は大きく歪み、後方へと吹き飛ばされる。パウダムは殴られた溝を抑え、立ち上がろうとする。パウダムが顔を上げると掌に青いエネルギー弾を生成し、見下すベジータ。ベジータの顔は余裕の笑みを浮かべたままだった。溝を抑えていた手ではない逆の手にエネルギーを集約させ、大きな爆発を引き起こす。爆発によって大きな砂煙が巻き起こり、ベジータは視界を遮られ、一瞬にして振り払うも、パウダムはすでに逃げていた。ベジータは変身を解除し、隊員がそこに駆け寄ってくる。

TCG隊員「あのご無事ですか？ベジータさん」

ベジータ「問題ない。それより、持ち場を離れて良いのか？」

TCG隊員「しかし」

ベジータ「オレの心配をするくらいなら、あっちを心配しろ」

ベジータは遺跡の方を指差し、隊員たちは早々と持ち場に戻って行った。遺跡から出てきた翠たちはヘリコプターに乗り込み、翠はベジータの前に立ち、会話を始める。

宇佐美翠「あの、外で何かありましたか？」

ベジータ「気にするな。それより、成果はあったんだろうな」

宇佐美翠「成果なら想像以上に。解説には時間がかかりますけどきつと役に立つと思いますよ」

ベジータ「そうか、さっさと行くんだな。時間が惜しいだろ？」

宇佐美翠「ベジータさんはこれからどうするんですか？」

ベジータ「オレはオレで動く」

宇佐美翠「そうですか。ご武運を！」

翠はヘリコプターに乗り込み、ヘリコプターは飛び立つ。ベジータはそれを見送ると、何処かへと飛んでいった。

パウダムは自身が支配しているポイント75へと到着した。パウダムがたどり着いた瞬間、二人のフリーザ兵が近づいてくる。

フリーザ兵A「パウダム様、ご無事で何よりです」

パウダム「心配させてしまった。まだ終わるわけにはいかぬというのに」

フリーザ兵B「パウダム様、実はパウダム様がここを離れていた時、地球人の小僧が

パウダム様の部屋に侵入していた為、身柄を拘束しました」

フリーザ兵Bがパウダムに告げると、フリーザ兵Aが後ろ盾を拘束された制服姿の少年を連れてくる。少年は身体を振るって抵抗するも、フリーザ兵の方が力強く、抵抗は無意味であった。パウダムの前に連れて来られると少年はパウダムの事を睨みつける。その目には憎しみと殺意が込められていた。パウダムがその目を注意深く観察し、フリーザ兵に指示を出す。

パウダム「ご苦労だった。持ち場に戻って構わない」

フリーザ兵A「コイツの処分はどうしますか？」

フリーザ兵B「オレたちがやっちゃっても良いんでっせ？」

パウダム「処分についてはワタシが決める。さあ持ち場に戻るんだ」

フリーザ兵はパウダムに敬礼をすると、この場を後に行つた。パウダムは少年に向き直し、拘束を解く。少年は少々驚いていたがすぐさまパウダムに殴りかかる。かすり傷もつかず、少年はポケットにしまっていたナイフを取り出し、パウダムに向けて、突撃する。パウダムは一步も動く事なく、少年が刺したナイフも根元の部分から折れていた。

パウダム「地球人の少年よ。名前は？」

少年「言うものか。僕の家族を奪った奴なんかに」

パワダム「そうだったのか。家族を奪った事にはすまなかった。だがワタシが戦った地球人は誰にも勇敢さがあつた。蛮勇だと最初は思ったが彼ら在必死になつてワタシに挑む姿に……昔のワタシの故郷の戦士たちを思い出した。今の君の姿こそ最初の彼らだが、いつかは君の父親のようになるだろう」

少年「信じれるか!?!侵略者の言葉なんか」

パワダム「……ここで立ち話も良いが、君に興味が湧いた。ついてきてくれ。来ないのなら手荒なマネはしたくないが力強くでも君を連れて行く」

少年「……分かつたよ。アンタには敵わないのはさっきので嫌でも分かつた。話し終えたらどうせ僕も殺すんだろ」

パワダム「さあな、ついて来ればわかる事だ」

パワダムは歩き始める。少年はパワダムの後ろ姿を見て、改めてパワダムの力を理解する。逆らうよりも従つた方が自身の身の為だと考え後を追う。いつかこの手で仇を打つために今は従おうと少年は考えたのだ。